

家族や引揚げの事

山形原 今野 忠市

昭和二十年八月夜中に遠くで大きな音がする。大砲の音のようであった。ひょっとしてソ連が戦争を始めたのではないかと思った。まもなく本部より連絡があった。皆引き揚げるようにとのことである。一週間分くらい食糧を持って行けとのことであった。皆大慌てである。

男の方は召集されて家族も女子供だけである。早速食糧の準備をして家畜等はそのままにして、荷物を馬車等に積んで出発した。ところが、私達の部落は本部よりは十六キロもあったので、本部に着いた時はもう皆出発した後だった。駅の方へと向かったが、途中町の方は危険だと思ひ山道を通ることにした。夜もまた雨が降る。河の橋も焼かれており馬車は通ることか出来なかった。荷物は馬の背に乗せて運んで行った。

暗くなつたので山泊り。木の枝を屋根に子供達とともに

に寝る。

そのうち食糧も残り少なくなつてきた。皆疲れてゐる。子供は腹をすかせて泣くようになる。泣けば銃声がある。弾が飛んでくることもある。それでも日本は負けない。何とか内地に辿り着くまでは皆頑張つて生きねばと馬等も殺して食べた。

あるとき、子供も荷物になるから殺してくれとの声も出るようになった。また、殺すよりはと子供を道端に置いてきた人もゐる。それも病の身である。どうにもならない。

もうこれ以上致し方ないと、皆で食糧を出し合つて白飯を炊いて食べてから死のうと決めたとき、遠くの方から旗を振りながら近づいてくる者があつた。ああ今度こそ殺されるのだと思つたが、それは敵ではなく満警の人と日本人だった。私達は彼らから聞いて初めて日本はもう戦争に負けたのだということを知つた。皆本当にがっかりした。

皆疲れきつていたので、その人の言葉を信じるほかなかった。各自持っていた武器等を取り上げられ、身体検

査をされると男と女に分けられて暗い道を歩いていった。

私達が連れられていったのは牡丹江の街であった。ここより列車に乗せられて奉天の街に着いた。そこで大きな大林組の倉庫に泊まった。夜はソ連軍がやってくるので女の人も男のようにして寝た。

ここで、病気になって何も出来ずに死んでいく人もあった。いろいろな苦勞があったが、生まれ故郷へ帰るまではと頑張って生きた。そして二十一年五月やっと日本へ引き揚げることになったが、そのころには満人の妻となつて暮らしていた人もあった。本当に子供のためと致し方なく行ったのである。

本当に国策移民として行ったのであるがこの結果は残念でならない。思い出して戻らぬことだが、忘れようと思つても忘れられぬことである。老人となつても頑張っているのである。よろしくお願い申し上げます。

引揚者体験の一断片

山形県 武田 莊太郎

東安省東安市三稜通の部隊給水所に勤務していた。こゝは最前線の国境部隊である。家族は妻と長女（三歳）とである。そしてあの八月九日を迎えた。

砲弾の音で起こされた私に「準戦時下令九日一時半」との部隊電話がはいる。すぐ軍装に身を固め家族にも最小限度のものだけを身につけさせすぐ出られるようにした。

二度目の電話は「伝令本戦時下令三時」と怒鳴るような声で終わる。私の行動の指示を受くべく部隊本部に電話した。

そこで受けた命令は「三稜通在住の日本人家族を連れ東安本隊に急げ」だった。

この日本人十人である。東安本部に着いたのは午前十二時半、ここで編成された部隊家族二千五百人の輸送